

朝鮮のシャーマニズム

(柳東植：『朝鮮のシャーマニズム』『韓国の宗教とキリスト教』を中心として)

0) 前提

0-1. シャーマニズムとは (アニミズム [精霊信仰] から派生：多神教的性格)

満州語：興奮する者、挑発する者、揺れ動く者。中国語：「跳神」

- ・イニシエーション体験 (苦難と死と再生)
- ・エクスタティックな神人交渉 (歌舞賽神)
- ・禍福の調節

◎伝統的に山神、地母神をまつり、禍福を調整する

⇒ 霊界が醸し出す災厄からの人間解放 (倫理思想、罪観念は弱い)

0-1-2 宇宙の三階層：上界(光明世界：主神、善霊)、中界(人物、生物)、下界(悪霊)

発展した教理を持っているわけではないので、容易に多宗教と混合される

0-2. 朝鮮のシャーマニズム

0-2-1. 機能 (() はシャーマニズムに共通な機能)

祈福(司祭)：祈雨祭、祈恩、祈子、城隍祭、別神祭、安宅神祭

禳災(治病)：治病祈祷、厄除け祈祷、巫呪(呪詛)、禁厭(災禍を逃れるため神符、呪文)

占卜(予言)

娯楽：歌舞娯楽 = 朝鮮巫教の特徴：神霊に対する楽舞から民間の娯楽行事に変化。

0-2-2 朝鮮シャーマニズムから見た朝鮮的性格(以下(『韓国の宗教とキリスト教』による))

- ・依他性：天地神明が人間の運命と生活を左右する = 吉凶禍福は運命的なもの。

儒教：事大主義に終始

先祖祭祀：先祖の霊に依存して現実の幸福を左右しようとした(×孝の本質)

- ・保守性：すべてのものが、自分に責任があるのではなく、超越的な神明に根差す = 文化発展の要因が根本的に欠如する(柳)

「他宗教を受け入れて、自己発展のための自己革新をもたらしたのではなく、単に他宗教の諸要素の中から、自己の好みに適したものだけを融合し、自己との公分母的なものだけを受け入れた。」「数千年もの間を、変化発展なく伝承されてきた巫教自体が、この性格を単的に説明している。」(『韓国の宗教とキリスト教』31, 32ページ)

仏教、道教との融合：祈祷祭祀法、神仙靈交法

= 巫教的特性に一致する限りにおいての融合

- ・現実主義的性格：現在、どのようにしてあらゆる災厄と不安から免れて安心立命の生活、幸福な生活を営むことが出来るかが全関心の焦点
= 永遠、明日はない

(昨日、今日という固有語にはあっても、明日という固有語はない)。

占い = 現実をいかに安心して楽しむか。

仏教：現実主義的な護国仏教、除災招福の祈祷仏教(民衆)

- ・ 娯楽性：運命論＋現実主義＝娯楽性。花郎道、歌舞藝術の発展の基礎。

0-2-3. 朝鮮のシャーマニズムの伝承の方向

- ・ 単純伝承（山川祭、祈雨祭、祖霊祭）
- ・ 複合的展開（外来文化との集合：花老道、八関会、燃灯会など）
- ・ 変容的展開（文化環境の変化によるシャーマニズムの部分要素の変容）

1) 原点

1-1. 神話（壇君神話など）

①天神降臨（東北アジアの北方遊牧民〔父権的天神信仰圏〕に共通）

・ 天帝桓因は子、桓雄に天符印三つを与えてこの世を治めさせる。桓雄は三千の部族民をつれて太白山頂の神壇樹の下に降りる。

（山岳信仰＋神木信仰）…天神降臨信仰の延長

= 天神の降りるところとしての山、木

→壇君＝1500年の統治の後、山神に化する（山神として祀られる）。

②地母神（南方の農耕的思想：生産と関連した諸霊信仰は地母神信仰の延長）

・ 熊女、トラ、人間になりたいと桓因の命令により洞穴の中に忌みこもり、熊女は人間になる。

= 死してよみがえる。穀霊の神秘力を体得（穀物、冬に枯れて春に再生）

③天神と地母神の結合＝桓雄と熊女から壇君が誕生。朝鮮を支配する（天と人間を繋ぐ「神」「巫堂」）

∴朝鮮：①、②の両者が混合した文化

シャーマニズムは汎神論であるが、全体の霊界を支配する最高神を認める：하나님〔ハナニム〕ただし、最高神の概念は大して発達せず、人事には干渉せず、配下である諸霊に人事を司らせると考える。朝鮮では祈雨祭のみは最高神に行うが、日常の人事に関しては配下にある雑神（山神、水神、三神）に祭祀を捧げる（柳東植『韓国の宗教とキリスト教』）。

【日本】

神は精霊のごとき存在で、特定の場所に常に定まる存在ではない。

「臨時に」神を呼び寄せて農耕に関する祭りを行う。来臨する神への目印として依代。

・ 神奈備：そのものが神のやどる聖地＝神体山

→天神が降りるところではない。

天つ神思想：大和朝廷が大陸の王権思想の影響の下に太陽崇拝を意識的に選択したもの

〈雄略期前後・天照＝天武期〉。

∴森羅万象は「天」「気」の作用でなく、数多くの人格神の働き。

③ 神話的巫具

壇君、天符印三具を賜る→三種の神器（東北アジアに共通する神話的巫具）

天、地、地下界を支配する力の象徴

cf. ①桓因 仏教の東方の護法神の名前 = 「釈提 (帝釈) 桓因

桓 [환] = 밝 (明るい) : 「光明な天神」

②壇君Tangun = アルタイ語のtenguri(天) の写音

熊 (köm) = kam(神)

山神として祀られる (降臨した天神)

農作、寿命、病気を支配 = 今日の巫覡と同じ

1-2. 実際に (この部分は鎌田茂雄『朝鮮の仏教』より)

・社稷をまつる

高句麗：鬼神、靈星、社稷神を祀る。

10月に東盟 (本来祭天儀礼であったが、始祖東明王を祀る始祖祭でもある)

韓族 5月、10月に鬼神を祀る

・蘇塗=聖域

聖域の中心に大木。鈴や鼓をかけて、鬼神を祀る

村の入り口や他邑との教会に設ける (アジールの役割も)

◎五穀神、天神崇拜 = 仏教を受け入れる精神的風土となる。

2) 新羅

1-1. 単純伝承 祖霊祭、山川祭

・祖霊祭 抽象的な祭天儀礼が、具体的な「祖霊祭」に変化

・農耕儀礼

・山川祭 「新羅好祠山神」(旧唐書) 山頂に降臨した天神、天帝の子始祖霊

水神→竜神信仰に変化

・守護祭 城門などの守護神を祀る (蘇塗祭(三韓)→守護祭→城隍信仰と習合(高麗))

1-2. 複合的展開 花郎道、護国の龍神信仰 (新羅中期 = 全盛期)

= 仏教、道教は霊界の要素を多分に持っているので容易に融合しやすい。

1-2-1. 花郎道

女性花郎→男性花郎に

本体神事は女性が中心→男性に (美男子、粧飾 : 朝鮮時代でも男巫は「花郎」と

呼ばれ女装した)

・イニシエーション

金庾信 : 中岳石窟で苦行→老人より方術を与えられる→天官重光 降霊於宝剣

(シャーマンの修行と類似)

元曉 : 真っ暗な墓場で髑髏の水を飲む→翌日聖人となる (墓場=死、聖人=再生)

・エクスタティック : 「相悦以歌楽 遊娛山水」

・禍福の調節

新羅の貴族は現実肯定的な雰囲気を持っていた。彼らに合う仏教を受容するか、彼らの志向に合わせて仏教を受容しようとした。⇒弥勒下生信仰

(朝鮮シャーマニズム…天神は降臨するもの、∴極楽往生ではない)

花郎 = 弥勒の化身

真智王代、興輪寺僧、真慈が弥勒像の前で「花郎に化身して現れることを願う→お告げに従い、樹下で未尸を発見。連れ帰り花郎とする(遺事3卷)。

未=弥(音通)、尸=力と形が似る ∴未尸=弥力(ミロク)

固有朝鮮語で竜をmili、milwという。護国の龍神信仰にも繋がる

【弥勒信仰】

弥勒は釈迦入滅後56億年7千万年後に悟を開く。そのときに衆生に真理を説き、聞いた衆生は解脱していく。釈迦はすでに涅槃の境地に入っているので何もしないし、何も出来ない。そのため、現に「悩んでいる」弥勒に期待した(北魏：、雲崗、大同)。しかし、弥勒自身は説法するだけだったので、中国では直接衆生を救済する阿弥陀に関心が移っていく。一方、南北朝の混乱期に多く作られた疑經には、弥勒信仰の変遷も見られる。「末法」の時代、世界に終末が訪れる。そのときに弥勒が代わりの者を送り、衆生を救済する。その後弥勒が現れ平和な世の中を作るというものである。中国では主流にならないが、この思想は民間の間に生き残り、白蓮教徒の乱の思想的背景となる。ベトナムもそうだが、朝鮮も大国に脅かされ続けていた。その中で弥勒が降りてきて、そこが世界の中心となるという思想が出来上がる。また、弥勒が降りてくるまでの繋ぎとして地藏、阿弥陀が信仰されるようになる(『弥勒信仰のアジアより』)。

…朝鮮の建国神話は、天から山に降りてきた神から壇君らが生まれ、そこに世界が形成される(イニシエーションを経た王の誕生により世界が出来る)。弥勒が降りてきたところが世界の中心になるという考えとパラレルになるように思われる。すでに新羅時代、王は弥勒の生まれかわりであり弥勒の降りてきた仏国土が新羅という考え方が出てくる。[華嚴經の影響で弥勒からビルシャナに変わるが]。やはり、弥勒信仰もシャーマニズムと融合した結果のように思われる

【華嚴經】

ビルシャナ = 無限の光が遍く照らし出す→照らし出されたものは平等。

cf. 大日：真理そのもの

- ・一即多、多即一
- ・仏と衆生と心は同じ：

仏が迷うと衆生になり、衆生が悟れば仏になる。仏にもなるし衆生にもなるもの = 人間の心。

魔が差すこともあるし、一瞬の間に悪魔になる事もある。また、仏のような気持にもなれる。

→意識とは →唯識

どんな妄想をもった心の中にも清らかな心が貫徹する

cf. アラヤシキと如来蔵

われわれのなかには眠っている仏心がある。それが何かの因縁で現れたことが発心…魂の奥底にある仏の心が表面に現れたこと。発心がすなわち正覚

cf. 法華經はどんな人も仏になる可能性があるのだ、それを修行によって表していかなくてもいけないと考える。

一切は仏性の現れとして輝いている。仏性の顕現＝すべては仏の光明に包まれたもの：悪、煩惱、汚濁は仮の存在、全部仏の中に包まれて消えていく。

→修行もいらなくなる（哲学としては理解出来るが、実際にはこれでは人を救えない）。

新羅華嚴

元曉：真俗一如(真即俗)＝一切の衆生は同一の仏性：聖俗を区別する必要は無い（世俗主義）

一切無碍人、一道出生死

和諍論：一即多、多即一なら分派闘争する必要は無い。

義湘（智儼の弟子）

唐で華嚴を学ぶ→帰国、華嚴十刹を建立（敵の侵入ルートの拠点）。

- ・華嚴一乘法界図→図印を唱えながら曲がっていくと、最後に仏の悟りへと到達する
＝哲学的思考の追究でなく、実践で海印三昧の世界に突入する。
- ・事事無碍、事理無碍でなく理理無碍を認める＝あらゆる個物の中に個物がもつ理を認める。
それぞれの理は共通。

現在：曹溪宗（禪宗系） 教理上華嚴思想の影響が濃厚。『華嚴經』の学習、「華嚴經略纂偈」

（鎌田茂雄『華嚴の思想』ほか）

1-2-2. 護国の龍神信仰

＝朝鮮シャーマニズム：農耕文化の発達につれて農耕儀礼と、それに関連した諸霊信仰に重点が移っていく。

∴農耕神が具体化して水神→竜神となる。

古代中国 地上の蛇＋天上の星＝竜。蛇：水物⇒雨を降らす神霊

竜信仰：農耕文化の貌により流入

＋

歳伯のミリ（弥里）信仰＝漁労を左右する水神信仰（柳東植説）

4世紀の新羅：君主国家体制を整える

護国の竜神信仰＝仏法守護霊としての竜王信仰と習合

※新羅は日本海側から侵入する倭人に悩まされていた。

- ・脱解王：東海竜神の子（同時に吐含山の山神）
- ・文武王（新羅を統一した王）：死して東海の竜となり故国を護らん
＝海中王陵、感恩寺。

特に統一新羅成立による 民族意思による護国思想＋護法思想（仏教）

∴護国の竜神思想、花郎＝朝鮮シャーマニズの第1の転換点

1-3. 変容的展開（新羅後半）

新羅王権の弱体化＝社会不安の増大

護国の東海竜信仰⇒除災招福の巫神へ：処容郎伝説。

仏教：国家守護から個人の厄神の駆逐へ

国家に対する関心よりも個人の安寧幸福に関心が移った。
シャーマニズムの役割＝個人の除厄、治病、辟邪進慶
＝朝鮮シャーマニズムの第2の転換点

3) 高麗

八関会、燃灯会 シャーマニズム（仏教を媒介）

大廟祭、山川祭、祈雨祭（司祭としての巫覡があらわになる）－単純伝承

1. 単純伝承

1-1. 山川祭

天神の降臨した神格＝山神

地母産神 大河川神

1-2. 祖霊祭

成宗（987-997）大廟を建てる

始祖霊祭 古代の祭天祭同様、囚人を釈放

祖霊祭と山川祭が平行すること多い。（農耕儀礼の流れを汲む）

1-3. 祈雨祭

農耕民化した高麗人にはもっとも重要な儀式

5月前後から乾燥期…多くの巫覡をあつめる。

早雨＝天神、山川諸神が左右するもの

旱魃＝主宰神の怒りに由来

∴巫覡が重要（神意を探り、神霊と交渉し、慰める必要）

2. 複合的展開

2-1. 八関会（祭天山神系）：天地神明に支える秋の収穫祭（新羅時代の花郎にあたる）

新羅真興王(572)以来。高麗に入り本格化

盛行期：11世紀＝不安定期、武神政権と蒙古侵入(高麗の諸宗教と信仰の盛行期)

本来：八戒を行うこと（殺生、盗竊、淫妖、飲酒等を8種類のことを行わない）

・ 仏教文化が風靡した時代であるため、寺で行うが、禁欲ではなく、飲酒
歌舞を伴った古来の固有信仰形態をとる

・ 10月を前後して行う（収穫祭）

八関 ≡ 밝안 (光明) = 言語的に融合しうる

・ 高麗は高句麗を継承した国家

∴東盟祭を継承した祭天儀礼、収穫祭をかねる

①祈雨祭として

本来の八関会とは関係ない。

天神、祭神、竜神を祀り、歌舞賽神による祈雨祭を行う＝収穫祭

②守護祭（国家守護祭）

外敵の侵害を防ぎ国家を守護するもの＝東盟祭「有軍事亦祭天」と同じ性格。

③慰霊祭

収穫祭として天神に対して行う＝感謝祭＝穀霊信仰に基づく農耕儀礼
穀霊＝死と再生→祖霊の甦り観念と融合する。
(新羅で始まったとき、戦死士卒のために八閔会を行った)

◎民族祭祀の継承＝花郎が四仙楽部として八閔会に参加、百戯舞歌を行う。

2-2 燃灯会 (1月15日)

仲冬の八閔会とともに高麗の二大法会

初出：新羅景文王6年(866)…おそらく6世紀から(高麗では八閔会とペアーで行う)

本来：仏に対する供養の一様式

燃灯 (연등) ≡ 竜童 (용동) = 融合しうる。

：竜童 新羅／竜＝守護神、農耕神 脱解王＝竜童

- ① 祖霊祭：太祖礼拝
- ② 護国祭：八閔会と合わせて行う：太祖礼拝自体が国家観念を有す。
- ③ 歌舞賽神：息災祈福祭

◎歌舞をもって天下の太平を祈り、三界の神祇を祀って息災を祈る。

仏教そのものがシャーマニズムを背景に融合していく。太祖「現在に至るまで創建した寺はすべて、道説国師の至誠によるものであるので、やたらと寺院を増やして地徳を傷付けてはいけない。私の願いは燃灯と八閔にある…」。道説：陰陽地理により太祖を指導していた国師。仏教は宮廷においては仏教を穰災招福の道具として用いた。高麗八万大蔵経も「仏力をもって(契丹・蒙古を)撃退するための迷信から」彫った。また、穰災招福を目的とするシャーマニズムを混合したことで功利主義的信仰を形成した。護国仏教であるとともに、民衆にとっては仏力による現世利益が追究された(『韓国の宗教とキリスト教』)

3. 巫覡信仰の発達

高麗中葉から盛ん

降神＝山神、城隍神＝天神系

・司祭的機能、巫医的機能、予言的機能

3-2 内容

国巫堂における国行巫儀(国家単位)

城隍祭(村単位)

3-3 態様

椽のある屋内神堂(巫堂)、丹青満壁画神像＝帝釈神が主神、飲酒歌舞賽神、降神・神託

◎現在のムードンの形式と一緒。

4) 朝鮮

0. 儒教主義の成立

高麗忠烈王(1274-1308)、儒教理念が取り立てられる。(流入は新羅時代)

高麗末：朱子学による刺激＝安珣（1243-1306）が導入
朱子学以前の『儒教』は五経の訓詁学、詞章学に留まっていた。朱子学はそれまでの訓詁学などとは異なり、終始一貫した思想体系を備えていた＝仏教哲学との衝突。

仏教一派の政治的墮落→拝仏抗争→李朝成立＝揚儒政策

- ・ 仏僧弾圧
- ・ 巫覡信仰も排斥の対象＝仏教と融合していたため

しかし、儒教＝民衆の宗教心を満たすだけの宗教的要素はない。

学問的性格…一部指導者階級の独占に留まる。

∴ 民衆、指導者までも形を変えて巫覡信仰を密かに持ち続ける。

【儒教】

- ・ 中国：現世は「快」。1分1秒でも長生きしたい。→死後も現世に戻りたい。
→魂が戻るべき肉体が大切「骨を保存→墓」。→帰るべき戸に魂魄を招く＝再生。
- ・ 儒：招魂儀礼を基礎として体系化：祖先崇拜、祖霊信仰をするためには祖先祭祀のための子孫が必要⇒孝：祖先祭祀（招魂儀礼）、父母への敬愛、子孫を産むこと。
- ・ 儒教：生命論としての「孝」を基礎として、家族倫理、社会倫理を作ったもの。
- ・ 新儒教（12世紀：朱子学、陽明学）＝宇宙論、形而上学まで

（加地伸行『儒教とは何か』）

◎朝鮮では仏教を排除するため、宗教として受容（日本＝「儒学」）。

朱子学中心で陽明学は受容しない「紹介された途端に一蹴／科挙とも関係」。

【朱子学】：朱子（1130-1200）

性即理：性は即ち理なり。天下の理、其の自る所を原ぬるに、未だ不善有らず。喜怒哀楽の未だ発せざる、何ぞ嘗て善ならざらん。…性は天より出で、才は気より出づ。気清ければ則ち才清

く、気濁れば則ち才濁る。才は善あり不善あるも、性は則ち不善無し。＝性善説

「理」＝天理として唯一かつ純善／普遍的な規範、道德性〈形而上の原理〉。

「気」＝物質成：全物質の素（エーテル）⇒陰陽、五行〈形而下の素材〉

「人は本来、天から百%の『理』が与えられる、ゆえに全ての人間はもともと百%道德的で善」。

それなのに悪い人がいるのは「『気』のせい。」「『気』の性質の組み合わせによる千差万別の多様性が、万物の多様性を生む」「濁った『気』は『理』をくもらせてしまう」

（小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』より）

李退溪：理気二元論

李栗谷：理気一元論

【陽明学】：陸象山－王陽明（1472-1528）

心即理：すべての理はわが心にある。物の在り方を格（ただ）して、人間本来の良知を致すよう

にする。良知とは、人間本来の知であるから、先に理を知り、然る後に実践する朱子学の立場ではなく、「知行合一」にならざるを得ない。「孝」は人間本来の内なる心にあつて、その理を知らなければ実践出来ないものではない（姜在彦『朝鮮儒教の二千年』より）。

陽明学は「朱子学の理屈の多い主知的な行き方を批判し、人間にはもっと大切な、溢れ出る生命のような生き生きとしたもの(良知)があり、そこを重んずるべきものとした」ものといえる
(『儒教とは何か』)

◎朱子学により韓国人に無神論的な基盤が形成された。宇宙万物は無人格的な理と気の造化と説明される。人格的な天地の主催者としての神観念が存在する余地はない。「所謂主宰者即是理也」。
結果的に無神論的功利主義の世界観となった。
(『韓国の宗教とキリスト教』)

1. 単純伝承 (排斥対象から除外)

1-1. 山川祭

祈福祭：山神＝祭天祭。ex.摩尼山に祭天壇／祈雨祭／祈病祭

1-2. 祈雨祭：巫覡により主宰

1-3. 祖霊祭：特に壇君祭

2. 複合的展開

八閔祭、燃灯祭→廃止：仏教行事のため

儺礼、城隍祭→中国の祭儀風習（事大主義の時代）

2-1. 儺礼（中国の驅儺礼）。大晦日、悪鬼疫神驅逐の行事

1) 驅儺部＝中国伝来の宗教儀式

中国：季春、仲秋、季冬の儀式

朝鮮：季冬のみ＝仲冬の八閔会に代わるもの＋歌舞百戯の結合

2) 親戯部＝演芸化した儀式

2-2. 城隍祭

城隍＝城池（城市保障のための池溝）のこと

城池の神：水（隍）庸（城）神崇拝＝城市の守護神信仰

高麗中期に朝鮮に入る。李朝で盛行

ただし、朝鮮に城池は存在しない。

d.h. 古来の天神、山神、守護神に対する信仰に「城隍」と名付けた。

城隍神：八蜡（8柱の中国の農耕関係神のこと）の第7神、水庸

＝守護神、農耕神。10月が祭期：朝鮮の10月の祭祀と一致。

山神、集落神信仰と融合

城隍（성황）≒山神（서낭）

3. 巫覡の盛行

巫覡を排除することは出来ない（仏教：シャーマニズムとの融合形態によって宗教的役割を持った）。

祈福祭、治病祭、死霊祭、神託卜占、歌舞賽神

宮中巫俗（王妃中心）

これらを通じて、巫俗儀礼が定型化、制度化されていった。

5) 現代

5-1. 宗教の状況

- ・ **既成宗教**：但し、儒教は冠婚葬祭を中心とした生活倫理の根柢として受容されている
- ・ **新興宗教**：韓国において形成。朝鮮戦争前後の社会変動期に組織。既成宗教より派生、または民間信仰を組織化
- ・ **民間信仰**：古代の自然宗教が残留継承された非組織的宗教現象。
 - ・ シャーマニズム的伝統信仰：巫覡信仰、山川祭、家宅神祭、部落祭
 - ・ 慣習的信仰：通過儀礼、生産と関わりをもった除災祈福
- ・ 吉凶信仰：卜占、択日、宮合、観相、手相、四柱、
- ・ 呪術信仰：禁忌、符籍、長丞
- ・ 陰陽風水信仰： 地理、明堂、鄭鑑録など
＝シャーマニズムが中心。一部が分離されている場合も多い。

5-2. シャーマニズムの状況

- ・ **単純伝承**：部落祭（洞祭）
- ・ **複合的展開**：三神信仰
- ・ **巫俗、巫覡信仰**

5-2-1. 部落祭

祖霊祭：李朝中葉に儒教の祖先祭礼に吸収。

祈雨祭：ほぼ消滅

山川祭＝洞祭、堂祭、山神祭：山神（山神、城隍神、堂山神）

正月15日頃か、10月。集落単位。

形態

1. 儒礼風のもの：祭官により主宰。歌舞を伴わず厳粛(李朝後半に成立)。
 2. 巫祭風のもの：歌舞を伴う。
＝いずれもシャーマニズムを継承。
 - ・ 焼紙(自己の願い事を口述しながら紙を燃やす儀式)と飲福宴(降りた神と一つの家族となり、神々と食事をする儀式)をクライマックスとしている点。
- ・ 降神を待って献酌娛神する→部落の加護と祝福を祈る。

5-2-2. 巫仏習合と三神信仰(仏教は植民地時代に再び隆盛し、信徒が増える)

大雄殿、冥府殿（地藏菩薩、十王）、三聖閣（七星閣、山神閣など）などからなる。

仏教儀礼

1. 仏陀と関わりを持つ各種仏事法会〈大雄殿〉
2. 死者の冥福を祈る各種の齋（死霊祭）〈冥府殿〉
3. 現世利益のための祈祷〈三聖閣〉

冥府殿を持つ寺は半分しかない。三聖閣は大多数の寺にある。

＝大衆の宗教的関心は来世の冥福より現世の福楽に強い関心を持つ
(日本の仏教に対する関心と大きく異なる)

三聖閣：七星、山神、独聖を祀る

李朝時代に入り、寺院維持のため民衆を引きつける方便として巫俗信仰の三神を奉安したと考えられる。

祀られている絵画：つねに七星（子孫を授かること、延命長寿）が中心。

山神：守護と事業繁昌（財福の神）

独聖：那畔尊者（出所不明、機能も不明）

= 巫仏仙融合とも言える。

三神は必ず画像で表現。シャーマニズムの巫神も画像で表現

【朝鮮仏教の特質】

- (1)和合一致元曉：一心和諍論⇒高麗・義天：新羅の五教九山を整理統合、天台宗を開き教宗と禪宗の合一を図る。李朝・休静：教を禪の予備門と見なす。教と禪を兼修。曹溪宗に一本化。仏教の大衆化のため、念仏を奨励。禪と同一の趣旨に帰する。
- (2)混合折衷主義：花郎道、道説：陰陽地理、風水を混合。高麗・太祖：シャーマニズムをかねて信奉。大蔵経も。李朝・休静：禪、儒、道は形式的には別れているが、「迷いを転じて『覚』を示す点では一致」。
- (3)功利的現実主義：朝鮮のシャーマニズム的心情に由来。

（『韓国の宗教とキリスト教』より）

- (1)護国仏教：李朝時代も。豊臣秀吉の出兵の時西山大師、泗溟大師
- (2)単純な仏教儀礼（儀礼、教義、経典（般若心経））
- (3)総合性：華嚴も法相も三論も浄土教も婚前融合。一人の僧侶が座禪も組めば、念仏も唱える
- (4)複合性：三聖閣。寺刹の神衆壇。八大金剛、四大菩薩、十大明王、帝釈天のほか、日月、七星、二十八宿、竜王、山神、竜神など護法の神仏。道教の諸神が混合。風水、巫覡。

（鎌田茂雄『朝鮮仏教史』ほか）

【キリスト教】韓国の一神教的要素が素地となる。

- 1)キリスト教の神：シャーマニズムの主宰神（倫理的神、預言者として受容しているかは別）。
シャーマン＝霊界と人間の仲介者：神と人間の仲介者イエス
上界、中界、下界：聖書の神話的世界像を理解する手がかり。
- 2)現実主義的な除災招福の宗教として受容（聖職者にシャーマンの仲裁の役割を期待）。
- 3)依他信仰性：「信仰によって救われる」⇒信じさえすれば幸福になる。
- 4)保守性：宗教行事＝呪術信仰、律法主義＝シャーマニズムの影響

（柳東植『韓国の宗教とキリスト教』）

儒教による父系制社会の成立（父系制のもとで出来たキリスト教を受容しやすい）。

キリスト教も十戒で父母に対する孝養を説く→儒教や仏教の倫理に通じるものがある。

（浅見雅一、安延苑『韓国とキリスト教』）

- ・朱子学の「理」に変わる新しい「理」…抗日運動、民主化運動、社会のエリート層の信仰
：理のキリスト教

第2部 朝鮮シャーマニズムの特性

日本：卑弥呼＝祭神の降臨、神意を伺う（神社祭祀）と神社に使える巫女。

中古以来、外来侵攻の影響。平安時代、怨霊の跋扈と御霊信仰の影響

→死霊供養儀礼としての「口寄せ」をする民間扶助が形成（日本シャーマン）

朝鮮と同じく、北方系のもの

イタコ（>idakon 女巫 モンゴル語系統）、ユタ（>udagan モンゴル語）説
ムーダン（>udagan）

韓国の巫覡の類型（入巫形態）…中央アジア、東北アジアのシャーマンもほぼ同じ類型

世襲司祭巫：降神体験なし。神壇なし。歌舞はするがエクスタシーもなし。

神託を語らない。交霊者ではなく司祭者（南部地方のタンゴル）

・地域組織をもち、巫祭権を所有する（南部）

降神靈感巫：巫病減少をともなった入巫過程。神母と神娘：大多数のムーダン

巫病→没我入信→人格に異常をきたす→

・神壇、歌舞交霊によるエクスタシー、神託

・（南部）勢力をもたず、卜占と祈祷に従事。

・（中部、北部）降神巫が勢力の中心。檀家関係を持つ。

習得巫：擬似シャーマン（糊口の策として…）

※シャーマンには善霊と交霊する白シャーマンと悪霊と交霊する黒シャーマンがあるが、韓国のシャーマンは白シャーマン系。

3つの聖物：鈴（悪霊が嫌う）、太鼓（善霊が好み、悪霊が嫌う）、鏡（光明、照影の神秘性）

役割分担：巫祭りは世襲巫が、病因を語り、吉凶日の選択は降神巫

※本来のシャーマンは基本的には交霊者として機能する。司祭者ではない。朝鮮は交霊行事と司祭的機能に別れているところが特殊（巫儀そのものの目的と機能〔治病、卜占、鎮魂送霊〕は朝鮮もツングースも一緒）

◎日本：特殊な発展

真正巫：降神巫〔シベリア型、召命入巫者〕 卑弥呼、神功皇后

→平安時代の御霊信仰と修験者、陰陽師の台頭：シャーマニズムに著しい変化

「いたこ」（痕跡）、新興宗教運動の教祖（天理教など神道系）

擬制巫：日本的シャーマニズムの本流

・**神社ミコ系**（世襲巫）：歌舞賽神を主に儀礼執行を行う神楽ミコ〔タンゴルに類似〕

・**口寄せミコ系**（習得巫）：今日の日本のシャーマンを代表するもの

生霊と死霊の意思を伝え、神の判断を伝える（霊媒的巫女）

巫病的イニシエーション体験なし。巫術を習得。
エクスタシーに入らない（例外：いたこ）。

【御霊信仰】

政治的事件で敗亡し処刑された人物の霊が祟ると信じ、霊を慰撫しようとする事

：奈良時代、特に桓武朝以降＝死霊が祟るとする観念の端緒

本来：祟り＝神の意志の表現／疫病：祖霊や死霊など人に属する霊格は祟るとは考えない。

律令体制による社会変動＝神の変化（自然神的存在→人格的存在）

祟りの機能：神→人間

奈良時代後期～平安初期＝反乱、疑獄

- ・朝廷：藤原広嗣、井上内親王、早良親王→慰撫のための復位、読経
- ・民間：疫神慰撫のための自発的祭礼

⇒852年 朝廷主宰 「御霊会」〔御霊信仰と疫神信仰が融合〕

新しい神格：牛頭天王、天満天神

疫神化しない怨霊：物怪

【修験道】

山岳信仰＋神仙思想＋雑密（奈良時代）→山林修行

平安時代：密教の体系的導入（最澄、空海）＝山岳修行の組織化、体系化

密教僧の間に山林にこもり修行を行う者が増加→験力を得たもの＝修験者

平安中期：律令の衰退：寺院は国家の庇護を期待できない：

寺院：本尊、神体の霊験を宣伝＋私的救済を祈願する信仰傾向＝霊場参詣
（貴族中心：摂関、院政期以降）

【陰陽道】

陰陽五行説に基づいて成立。律令・中務省に陰陽寮設置〔天文、暦、陰陽〕

神祇官の補助的要素→次第に祭祀的要素＋密教の影響＝宗教化。

中世：「まじない」が根づく時代。

→陰陽道の成立＝神祇祭祀を大きく改編。今日の神事作法にも陰陽道期限が多い。